

式 辞

ただいま、中学校八四名・高等学校三八二名の生徒の入学を許可いたしました。保護者の皆様、ご子息・ご令嬢の入学、誠にめでたうございます。心よりお慶び申し上げます。新入生の皆さん入学おめでとう。

通常であれば、多くのご来賓のご臨席を賜り、中学校第十二回・高等学校第五四回入学式を一同に挙行するところでありましたが、コロナ禍ゆえの対応、午前・午後の分散、時間短縮での実施とさせていただくこととなりました。ご理解をいただければ幸いです。

さて、二松学舎は明治一〇年以來、今年創立一四五年の歴史と伝統のある学校です。皆さんがこうした本校の一員として、誇りと自信を持って充実した中学校・高等学校生活を送ることを、我々教職員は強く願っております。

今新入生の皆さんは、それぞれに新しい夢や希望を持っていることと思います。中学校・高等学校生活は、その夢や希望を実現するために、自分の生き方を決めていく大切な時期なのです。そのような皆さんに強く願うことがあります。それは【何事にも挑戦する強い気持ち】を大切にしてほしいということです。

昨年度の流行語（年間大賞）は「リアル二刀流・ショートタイム」、米メジャーリーグで大活躍した大谷翔平選手に関するものでした。挑戦する努力が実り評価されたのでしょう。実はその米メジャーリーグに、誰もが感動する偉大な投手が過去にいたのです。ノーヒットノーランも達成しております。名前はジム・アボット投手といいます。彼は生まれた時から、右の手首から先がないというハンディキャップがありました。幼い時に父親からボール遊びの手ほどきをしてもらったのがきっかけで、野球が好きになったのだそうです。そして、いつしか野球選手を目指す決心をします。投げる捕るをはじめ、様々な動作を左腕一本でプロ野球に挑戦することは、想像を絶する苦しい道であったに違いありません。しかし、その困難を努力と工夫で乗り越えて、彼は大学生の時にソウルオリンピックにも出場しているのです。その上、決勝では全日本のチームに完投勝ちをし、大リーグ入りを果たしてしまうのです。そして、平成五年九月四日、ノーヒットノーランという大記録を達成したのです。ハンディキャップを克服したアボット投手は、新聞社のインタビューにこんなことを話しています。『人生は、いつも挑戦である』『自分は、ハンディキャップを決して意識しない』『他人ができることは、同じように自分ができることと信じてやってきた』『ここまで来られたのは、他人より、ほんの少し、多く努力しただけである』『最も勇気のある人間は、子供の時、自分に野球を教えようと、庭に連れ出した父である』。いかがですか、能力の差は小さいが努力の差は大きいということわざがありますが、アボット投手は人より不利を承知で自分の好きな道を選び、工夫を重ね、努力を続け、だれにも負けない栄冠を手にしたのです。新入生の皆さんには、自分の好きな道を自分で選び、努力を続けること、そしてだれにも負けない得意なことを、何か一つ身につけてほしいと強く願います。

皆さんが学ぶ論語に[力足らざる者は中道にして廃す。今汝は画れり]とあります。自分の可能性を信じることができず、自分で限界をつくってしまう人間は、成長できません。まず、限界をつくっているのは自分だということに気がつくことが大事。なかなか結果が出なくても、すぐにあきらめてしまってはもったいない。ひとつのことを少し辛抱して続けること、必ず人間は成長することができるという意味です。ぜひ参考にレジリエンス（復元力）を備え、力強く成長してください。

以上、本校での生活が実り多いものとなりますことを重ねて祈念して式辞といたします。

二〇二二年 四月七日

二松学舎大学附属柏中学校・高等学校
校長 七五三 和男